「日々の理科」（第 2760 号）　2022,-2,-7

「節分の日の空模様（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

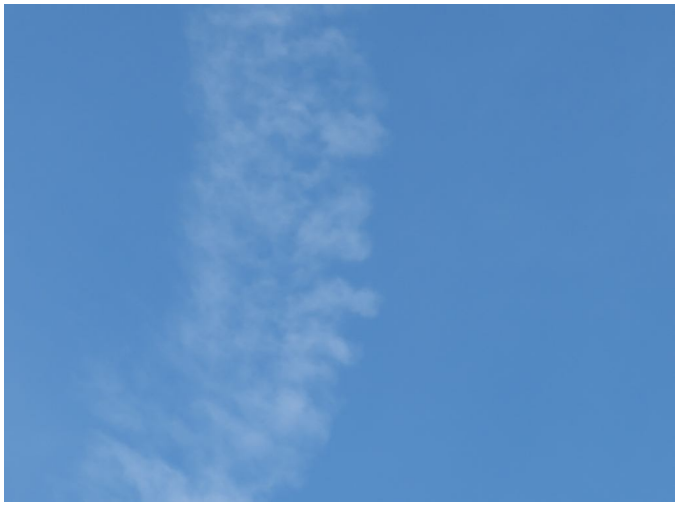
田中　千尋　Chihiro Tanaka

観察者から見て、天頂付近に形成された飛行機雲や、地平線に平行に飛行する航空機で形成された飛行機雲は、「横に長い形」なので、誰でも飛行機雲とよくわかる。しかし、観察者から見て、地平線に向かって飛行している航空機や、逆に地平線付近から、観察者に向かって飛行している航空機の場合、縦に長い飛行機雲に見える。

こういう飛行機雲は「地震雲」などと呼ばれ、大地震の前兆現象と言われたりするが、まったく科学的根拠はない。「地震雲」の正体の大部分は飛行機雲で、たまたま地震が起きることもあるが、ほとんどの場合、何も起きない。「迷信」或いは「都市伝説」と呼んでよいだろう。

航空機が去ったあとも、この飛行機雲は空に残り続けた。「ことわざ」に従えば、「悪天の兆し」ということになる。

時間が経つにつれで、徐々に広がり始め、飛行機雲らしくない姿に変化していった。



拡大してみると、細粒状の構造を持ち始めている。「十種雲型」では「巻積雲」に分類される特徴だ。

やがて「元飛行機雲」は、天頂まで移動して、ますます広がりを見せてきた。航空機が去ってから、この形状に変化するまで、およそ 20 分だった。